

TS（トータル・サティスファクション）を目指して M9

教育コーチングより ～育とうとしない生徒～

校長室担当より

教育コーチングを学ぶと、「人は育とうとする生き物だ」という言葉が必ず出てきます。その考え方に私は得心しています。「強くなりたい」「うまくなりたい」「いろいろなことをできるようになりたい」という意欲を持って、すべての子どもは生まれてくるのだと日々実感します。

しかしながら、校種を問わず、一部の子どもたちが「育とうとしない」場面に出くわします。これは、これを阻害するものがあるからです。この何かとは、一般的に「不安」「恐怖」「迷い」、あるいは「負担感」等があげられますが、私たち教員の「育てたい（指導したい）」とか「育てなければならない（指導しなければならない）」という一生懸命な関わりがこれを阻害することがあることも否めません。子どもが自ら「したい」という欲求を満たそうとする時に、自分以外から「させられる（指導される）」ことがあると、心の中でせめぎ合いが生まれ、物理の授業で学習した「作用反作用」同様に、私たちの「指導しなければならない」という気持ちが強ければ強いほど、彼らがこれと戦うエネルギーが大きくなってしまい、自分で「育ちたい」というエネルギーはその分だけ減少してしまうのです。

いくら学歴偏重社会が終わり、人間力が問われる時代になったとはいえ、学習「させ」、進級「させ」、卒業「させ」、進路を確定「させ」ていくことは学校の教師に求められています。しかし、「させる」人がいる限り「させられる」人がいるわけで、「させられる」人に見れば、それは程度の差こそあれ「服従」であり、そこに敗北感がないとすれば、単なる「依存」であるということは心に留めておくべきでしょう。

学校は、生徒がこれからの社会で人生を生きていくための支援を行う場。子どもたちが、先生がいなくても、親がいなくても自分の人生を自走していく力を付けるために、教師や親は存在するのです。教師も親もそうですが、子どもの「したい」を引き出し、支援する。これによって、子どもたちは、「させられる」から「したい」や「しよう」へとシフトしていくのです。ここが私たち教員のプロとしての腕の見せ所です。

（令和6年10月15日）